



日本記者クラブ

シリーズ企画「3・11 大震災」

五百旗頭真 復興構想会議議長

2011年5月13日

東日本大震災復興構想会議の五百旗頭真議長が5月13日会見、自ら体験した阪神大震災の教訓を踏まえて、6月末に予定されている第一次提言に向けての基本的考えを明らかにした。五百旗頭議長は、その中で復興財源については、増税をも含めた「ベストミックス」で対応するとの方針を表明、いまだに原子炉の安定冷却には至らず放射能汚染が懸念される福島地域についても、他の地域の復興と切り離さず、同復興会議で抱きかかえていく考えを強調した。また、歴史学者として、紀元663年の白村江の戦い、1945年の敗戦という2つのケースを引用し、逆境に強い日本民族の過去の歴史に今回も学ぶべきだ、との思いを披歴した。

司会 日本記者クラブ企画委員長 吉田慎一（朝日新聞）
代表質問 日本記者クラブ企画委員 倉重篤郎（毎日新聞）

（小見出し）

— 1 p —

「殺される」と思った阪神大震災
ツーバイフォーが強かった

— 2 p —

神戸港復旧でムダがあった

— 3 p —

自衛隊出動、県係長が「OK」

— 4 p —

阪神大震災に最も学んだのは自衛隊

— 5 p —

27本の新幹線、1本も脱線せず

— 7 p —

菅首相からの突然の電話

桜満開の里での見えない脅威

— 8 p —

今回は仮設住宅に集会所も

— 9 p —

一次補正の4兆円が効いている

— 10 p —

超党派で対処することの意義

— 11 p —

瓦れきを埋めて鎮魂の森を

— 12 p —

亡くなった方々の弔い合戦

500年前の米の地震記録が日本に

— 13 p —

土地対策で革命的な措置を

— 15 p —

原発問題抜きにして何の会議か

— 17 p —

200被災市町村にアンケート調査

— 18 p —

財政的にも日本は「レベル7」

— 19 p —

外国人労働者の永住化できないか

©公益社団法人 日本記者クラブ

大変な顔ぶれの皆様に前に、何か釈迦に説法になりそうな気もいたしますが、こういう機会をいただいたことを大変うれしく思っております。

「殺される」と思った阪神大震災

初めに、このたびの大震災を阪神淡路大震災と比較しながら外形をスケッチいたしまして、その後、復興構想会議にかかわる現時点のようなことを私のほうから話をさせていただいて、その後、質疑応答に入れるかと思っております。

マグニチュード9.0という途方もないこのたびの大地震であります。神戸の場合は7.3だったわけですね。震度はどちらも日本の大地における最大の7でありました。これ以上はないという震度7の烈震です。このたびは栗原市が最大震度7、その他の地域では6がかなり広い地域にわたっている。

神戸の場合が直下型であったのに対して、このたびは海洋プレート型です。直下型の場合は、ご経験の方、ここには結構おられるかと思いますが、真下から、至近距離ですので、いきなりドーンとはね上げられるんですね。家ごと、空中にほうり上げられるという趣ですね。

阪急電車で勤めている私の元教え子がいていましたけれども、地震による電車の脱線のあり方、状況の分析を命じられて、見て回りショックを受けていました。普通は、脱線するときに線路を車輪がどう切るかという、その痕跡が分析のすね。それによっていろんな意味がわかるのです。ところが、一つも痕跡がないというんですね。電車がドーンと空中にはね上げられて、そして落ちてくるときには横揺れが入るために、痕跡残さず、横へドーンと落ちていくというのです。

鉄の塊も空中にほうり上げているというのが直下型のすさまじさです。私も西宮の家で、もちろん、寝ているときでしたので、ドーンときたので、何だろう、飛行機が落ちてきたのか、山崩れがきたのか、わからない、というので目を覚ましたわけですね。その直後に猛烈な横揺

れが始まった。大地の魔神が我が家を両手で引き裂いて、つぶすまで絶対やめないぞ、というふうなすさまじいものだったですね。震度7、直下型というのは、そういうものなのです。

多くの家は、私の家も全壊だったんですが、しかし、なぜか、壊滅せずに、箱物は生き残って、それがどうしてだかわからない。なぜ殺すのか、殺意を持ってるのがわからない、というのが最初の思いでした。私は2~3分、引き裂こうという力にやられたという思いを持っていたんですが、後で聞いたら20秒、そんなばかな、という感じだったですね。

で、その20秒が終わった後、なぜ無事で生きておれたのかわからない。1時間ほどして夜が白んできたときに、娘が2階のベッドルームの——ベッドでみんな寝ていたから助かったんですけども——戸をあけたところ、お隣の2階建ての家のモルタルの壁がはげ落ちて、中の白木がニューッと出ていてゆがんでいるのです。

それをみてギャーッと叫び声をあげて、それで明るくなってきたんだとわかった。南側の2階の窓をあけたら、それまで社長さんの豪邸が君臨していたのです。大変いい人で、そこで働いている人が、子供たちに花やお野菜をくれたりして、仲よくしていたのですが、それにしても、少し高い位置にもあって御殿のように君臨している木造家屋の豪邸、それが消えてなくなっていたのです。ギャーッとこの感じですね。

ツーバイフォーが強かった

そうすると、わからないのは、どうして社長さんの立派な豪邸がつぶれてしまって、私の庶民の家が生きているのか。後でわかったのですが、ツーバイフォーで5年ほど前にささやかな我が家をつくったのですね。プレハブやツーバイフォーは一軒も壊れない、というのが神戸地震の大きな社会実験なのです。伝統木造家屋は、ドーンとはね上げられて横揺れが入ると、1階が二枚げりを食らったように横へ行ってしまうと、2階が上に乗っかって落ちるのです。もう

判で押したようにそういうのが連なっている。

そういう中で、プレハブやツーバイフォーというのはキューブですから、キューブは転がしても壊れない。ビルすら倒れる。総員退去になったり、ある階が座屈でつぶれてしまったりということはあるのですが、プレハブ・ツーバイフォーは神戸地震で一軒もつぶれていない。私はたまたまそれで家を建てていた。

それは、住宅公園を回っているときに、家内が三井ホームのイメージが気に入ったといったのです。私は悪い夫で、あまり家にもいない。今日、司会をしている吉田さんが出てこいといえ、すぐにハイといって素直に従って出てくる人なのです。

ですから、家に四六時中いるのは家内だから、家内が気に入るのが一番いいと思って、賛成、賛成、大賛成。私もサユリストだから、吉永小百合がイメージガールをしていたから、いいよと言って、三井ホームでツーバイフォーの家を建てた。そのときに安全を買っていたということが後でわかったのです。

このたび、びっくりするのは、栗原市は震度7、その他、6の地域が広がっている。そこで倒壊家屋による死者が出てないのです。直下型とは違う、プレートからですので、大揺れになるわけです。それにしても震度7で家がつぶれないというのは、日本も強くなったものですね。これは世界であり得ないことだと思うのです。

栗原市はどうしてつぶれなかったのか。それは、岩手・宮城内陸地震のときにはつぶれて犠牲も出たらしいですね。その後、神戸地震の後、全国的に補強が行われる度合いがふえましたけれども、特に岩手・宮城の内陸地震であの辺はかなりきつかったものですから、それから強くしたということによって、このたびは死者ゼロ。倒壊家屋による死者ゼロという、すごい記録を出したのだと思うのです。

その反面、大津波による死者はおおよそ2万5,000人に上ると言われています。神戸のときには6,434人ですから、4倍ですね。神戸の場合には、ほとんどの人が家屋の倒壊で、瓦れきの下敷きになって亡くなった。それに対して、

今度は津波にさらわれた。大地震には日本社会は強靱さを発揮しましたが、大津波に対してはあまりにも悲惨な犠牲を出し、さらに原発ということが複合災害になって、福島の人たちは大地震、大津波、原発に加えて風評被害、四重苦だ。さらに、ふるさとのまちを避難命令で出て、離散しなきゃいけない、五重苦だというふうに、ふるさとが大好きな福島の人たち、本当に苦しんでいらっしゃいます。

でも、あまり細かいことをいっていると貴重な時間が減ります。神戸のときよりも対処の進んでいるところもあります。

例えば神戸のときには、復旧には国がお金をつけるが、それ以上の、旧よりよくする復興は許さないという基準だったのです。神戸というのは、全国の中でも比較的リッチな地域だ。そういうところが同情心を得て、他の地域よりもさらに恵まれた状況になる、「焼け太りは許されない」というのが、後藤田正晴さんの、「後藤田ドクトリン」と呼ばれたのですが、復旧ならば、すぐ金をつける、しかし、よりよいものをつくるというのは、これは別だ、地元の努力でやってもらいたい、という基準だったのです。

神戸港復旧でムダがあった

そのために、非常に無駄なことも起こりました。例えば神戸港はすでに競争力を失って、釜山や高雄に負ける。それは、コンテナ埠頭が12mではだめで、15mないと対抗できなくなっていたのです。だから、掘らなきゃいけないかと思っていたところ、地震でつぶれたのです。地元の人たちは、これを機会に15~16mのものにしたい。そこへ復旧はいいが、復興だめ、というのが縛りにかかってきたわけです。それは自分たちでやりなさい。で、大急ぎで直すというのなら復旧だということで、また12mのものに直したのです。ところが、競争力は失われていく。10年後にまた掘り直すというふうなことをやって、それでももう挽回できないという、極めて無駄なことになった。

幸い、このたびは単なる復旧でなく“創造的

復興”ということが合い言葉になっている。東北の人たちが、旧に復するだけじゃなくて、新しいまちをつくり、新しい産業を築くことによって、日本全体の再生の引き金にしよう。これを私どももほぼ共通の見解にして会議を進めておりますし、総理もそのように発言されました。

それからもう一つよかったのは、外国からの支援をこのたび潔く受け入れましたね。神戸のときには、随分と支援のお声がけをいただいたのですが、地元のほうが初体験で、いやあ、お世話をする場所がない、泊まっていただくところがないし、人をつけるわけにいかないし、それから、国内基準を満たしてない。医療といわれても、医師免許がどうか、いろいろ平時の基準、ルールから、受け入れを難しく考えてしまったんですね。アメリカが軍艦を送ろうといったのに対しては、神戸が平和港湾だということで、核がないという証明書をつけなければだめだという基準があるとか、そういうので、外国の支援について実にうろうろしたのです。

それに対して、このたび、全面的に、基本的に潔く受け入れるという姿勢をとった。そして、世界から本当に支援の輪が広がりましたし、励ましていただいたと思いますね。日本の被災者たちの振る舞いがすばらしい、人としてのすばらしさを示した、というふうに外国で報道されることによって、日本のイメージはよくなりましたし、そのことが日本人への慰め、励ましになったと思います。

神戸のときには自衛隊の初動がおそいというのが大きな問題になりました。被災した地域が限定されているというので、中部方面総監は、この地域を管轄している第3師団、7,000人ですが、それで足りるだろうという判断をしたのです。7,000人ということは、送り出せるのは3,000人ということです。普通は3分の1ぐらいを出勤させます。支援部隊が必要ですし、ローテーションを考えれば、サステイナブルであるためには3分の1がいいところなのです。で、3,000人で出勤を命じた。それも、実際にその日に入れたのは交通渋滞のため400~500人というところだったのです。

実は、深さが読めなかった。朝、明るくなっ

た7時過ぎに、自衛隊は八尾飛行場から飛行機を飛ばした。当時はあまりいい装備がなかったので、家庭用ビデオで被災地を映した。それを総監部に届け、報告もしたんですが、上から鮮度の悪いカメラで写しますと、無事にみえるのです。さっきもいったように、1階が足払いを食らって、上に2階と屋根が載っているのです。屋根がちゃんとある、それほどすごい犠牲が出ているとは思えなかったのですね。

というので、地域限定はいいけれども、被災の深さというのを読めなかったために、対応が甘かったということがあります。よく知事の要請がおくれたから自衛隊が出なかったというふうにいわれますが、これは神話です。

自衛隊出動、県係長が「OK」

私は神戸地震の記録を永遠に残し、世界に示したいというプロジェクトの責任者になって、関係者と考えられる、ほぼ全員にインタビューいたしました。自衛隊の出動は県知事の要請でということになっておりますけれども、神戸市を担当していたのは姫路の第3特科連隊です。昔でいうと砲兵隊ですね。西宮、芦屋市を担当していたのは、伊丹の普通科36連隊、昔でいう歩兵です。その2つが担当して、それぞれ早朝、地震の直後から準備しているのです。そして、姫路の準備ができたのが10時なのです。出動準備ができた。

しかし、知事は情報ブラックアウトになって、電話も通じない、連絡のしようもない。そして、知事には自分の管轄下で何が起きているかもわからない状況で、具体的な要請ができないのです。そうしたら動かないかという、自衛隊は、これほどの大きな揺れがあったら、必ず出動要請があるというので、もう朝から準備しているのですね。それで10時に準備ができた。

そのときに、幸運にも、姫路の第3特科連隊の三尉から兵庫県庁の野口防災係長に電話が通じたのです。早朝、1度通じて、その後、通じなくて、10時に運よく通じたのです。そこで、自衛隊のほうから、「この電話をもって知事の

要請とさせていただいていいか」と聞いたのです。野口防災係長は、知事の意味を聞いておりません。しかし、自分が防災責任者だ、現場担当者だというので、当然と思ったと彼はいうんです。「よろしくお願いします」と知事になりかわって独断専行、出動要請をしてしまったのです。その後、大急ぎで階段を駆け上がって、知事の部屋へ飛び込んで、いま、自衛隊からこういう電話があったので、こう答えましたといったところ、貝原知事は「う、う、うーん、やむを得ん、それでいけ」といったのです。

実務的にどの地域にどのぐらいの兵力をどういう目的で送るかというのは、緊密に連絡しながら、それが事務レベルでできあがったところに、知事の要請と称するセレモニーが行われる、これが実際の運営なのです。ところが、このときには、連絡がつかないという中で、白紙委任的なものになるけれども、野口防災係長の独断、あるいは自衛隊のほうから出動要請とさせてほしいとってくれたおかげで、実は、準備できた、その瞬間に、要請なるものができあがったことになりました。結果的に知事の要請が遅かったからというわけじゃないのです。

本来であれば、知事が現場の実情を踏まえて、自衛隊と具体的内容を打ち合わせた上で出動要請をするのが手続きだったが、知事は配下の実情が判らず、自衛隊自身もそれほど兵力が必要だとは判断しなかったということによって、その日は数百人しか入らなかった。で、夜になって、中部方面総監は、事態は甘くないとわかりました。そこで、自分の管轄内——中部方面総監というのは名古屋の第10師団から広島、四国、これ全部入っているのです。大きな管轄区域を持っているのです。その全部隊を投入するという決定をいたしました。けれども、翌日着けるかということ、着けないのです。翌日は交通渋滞で動けないのです。もう一晩、深夜になってから、やっと現地に入れるというので、もう3日目になってしまった。という事情で、兵力の逐次投入のようなことになってしまったのです。

ともあれ阪神大震災の初動で自衛隊は生存救出というのは非常に少ないのです。165名だけです。自衛隊が入って行って瓦れきに埋もれ

て生きている人を救出した数が165体なのですね。生存救出だから貴重ですが、警察の場合には3,500ほどしておりますし、消防隊も700余りやっております。それに比べて自衛隊は少なかった。

しかし、その後、自衛隊は自己完結的な組織力を発揮して、底力を発揮する。ローラー作戦とって、すべてのつぶれた家を掘り返して、全部の遺体を確保するというのでは、圧倒的な役割を果たしたのです。で、阪神淡路大地震で行方不明のまま終わった遺体というのは、3体だけなのです。3人を除いて、全部、身柄を確保したのです。これもまた日本のすごいところだと思います。

四川大地震のときには、山崩れでまちが埋もれてしまって、もうそれを掘り起こすのはあきらめて、その上にまちをつくったりしましたよね。もうやむを得ない。でも、神戸地震のときには、ほとんどゼロに近い、3体以外は全部、身柄を確保した。それが今度の津波では全然できない、すさまじいことになったわけです。

自衛隊は、神戸でその後、ライフラインを100日間支えた。市民の間で、やっぱり本当の危機が来たら自衛隊が頼りなんだ、というふうに国民の信任を得たのが神戸地震だったですね。しかも、その後、自衛隊は非常に改革いたしました。神戸地震から最も学習した組織の一つが自衛隊だと思います。

阪神大震災に最も学んだのは自衛隊

何をやったかということ、すべての日本じゅうの連隊の中で、1小隊30名ですね、30名が24時間起きて、いま、何かがあったらすぐ出動できるという態勢をとった。これは非常に大きいのです。これが先遣隊になるわけですね、現場を確かめる。起こった瞬間に動けるというのを、全国の連隊に1小隊用意するようになった。

それからもう一つ大きいのが、中央即応集団というのが数年前にできたのです。これは、外国出動、ハイチへ行くときもそうですし、何のときもそうなのです。たとえば、科学テロとか

放射能もそうですが、中央即応集団のもとにいろいろな特殊部隊、それから、外国へ派遣する訓練をしている教育隊、そういうのをおさめて、何か突発事態が起これば、国内でも外国でも、直ちにまず動く部隊として用意されたのです。それがいろいろな専門機能を持っていて動く。その後、今度は統合運用というふうになっていますので、統幕長のもとで陸海空自衛隊を統合的に大臣の命令で動けるというふうに、神戸地震以後、変えたわけです。

その結果、このたびは極めて迅速に動くことができた。特に状況がこれほど広範で、3 県を中心に、東北地方、太平洋岸全域にまたがるということになりますと、日本の政府機関で一手に管轄できるところはどこもないわけです。県も別々です。ところが、自衛隊の東北方面総監部だけが、ちょうどこの地域全体を管轄しているのです。そこで、統合運用のもとで、折木倒幕長が市ヶ谷で全体指揮はとるけれども、現場の統合指揮官に君塚東北方面総監が任命されて、陸海空全体の運用に当たるということができたわけです。ただ、福島原発対処には、中央即応集団の宮島司令官があたる、というように役割分担しました。

その結果、自衛隊による救出、生きて救出された人は1万9,260名ということになっております。神戸のときの165名しか生存救出できなかったのに対して、このたびは全体で2万数千のうち1万9,000余りが自衛隊によるということで、圧倒的な役割を果たすことになったわけです。

特に交通システムが寸断されております。通常の救出活動は、大体3局面で当初動きます。最初は人命救出です。これが最優先されます。第2局面は、瓦れきでふさがった道路啓開。血管が通らないと救出活動できませんので、瓦れき処理をしながら道を通す。その後を追うようにライフライン、人々の食べ物と生活を支える。

この3局面で比重を移しながら動くのが普通ですが、このたびはこれが分けられないのです。人命救助というのが、どこかの時点で、神戸の場合だったら、もう3日たったら生きている人

はいない、それ以後は奇跡でしかない。1週間ほどたったところ、10日目ぐらいからローラー作戦が始まって、これは遺体の身柄確保。それをやったら、もうこれで人命救出は終わりなのです。後は道路啓開と瓦れき処理とライフラインというふうに行くのですが、今度の場合にはいまだに遺体救出が続いているわけです。

特に海に流れ出た遺体というのは本当に大変です。漁業をやっている専門の人たちに、「21日目の浮上」という言葉があるそうです。海でおぼれた人というのは、浮かんでいる人はすぐ浮かんでいる間にできますが、やがて沈むのですね。で、沈んでしまったら、永遠に沈んでいるんじゃないくて、21日目に再浮上するのだそうです。体の中にガスが発生して、そのガスが体を軽くして、21日目にもう一度海面に上がってくるのだそうです。ですから、漁業関係者はその瞬間をとらえて捜すのです。

その教えを受けて、自衛隊と、それから、このたび、トモダチ作戦でアメリカ軍が手伝ってくれて、21日目から大規模捜索作戦というのをやった。4週間たったら、1カ月たったら、もう一度それは沈んでしまって、もう永遠に上がってこない。ですから、最後のチャンスだということでやった。それで区切りをつけられるかと思ったのですが、確かにそのときかなり遺体を確保しました。しかし、瓦れきに絡まっているものですから、それで終わらないのですね。また岸に流れ着いたりというので、遺体捜索はいまだに続いていて終わっていない。生存救出は1万9,000余りで、もうそれ以上はあり得ないですが、いまもなお、例えば5月11日にも11体の遺体救出をしております。そして、自衛隊がそれを合わせると8,300体ほど遺体救出した。そして、まだ終わらないという状況であります。

27本の新幹線、1本も脱線せず

先ほど震度7なのに犠牲がなかった、地震での倒壊犠牲がなかったということはすごいと申しましたが、もう一つ驚くべきことは、この3県の激震地域に新幹線が10本(東北新幹線全線

では27本)走っていたのです。その新幹線が一つも脱線しなかったというのも、やはり驚くべきことだと思うのです。

緊急地震速報、最近、たくさん余震が起り過ぎるために怪しくなったといわれるテレビに映る速報、あれは携帯でも受け取る人は受け取る。あの同じ装置が新幹線にもつながっているわけですね。東日本大地震が海洋プレートで起こった。一番震源に近い宮城県内を265キロで走っていた列車も、実際の揺れが来る9秒前に急ブレーキがかかったのです。福島県郡山あたりを270キロで走っていた列車は揺れが来る30秒前にブレーキがかかった。かなりスピードが落ちてから揺れ始め、そして大揺れが来た。そのおかげだろうと思うのですが、全く新幹線が脱線しなかった。これも日本でなければちょっと考えにくいことではないか。神戸のときには、新幹線の高架が落ちましたし、新潟の中越地震の時は脱線しました。新幹線の安全技術は進んでいるのではないのでしょうか。

逆に、神戸のときに比べて進歩してない、足りないと思われるのが、ボランティア活動です。神戸の場合には、最初の1カ月間、兵庫県に延べ62万人が来てくださった。このたび、1カ月間に3県で延べ9万1,000人。2カ月目の連休を超えた5月11日ですが、その時点、神戸の場合には1万3,600人がボランティアで来ておりましたが、このたび、東北3県に5,500人しかボランティアが展開していない。

神戸の場合には、被災者5.7人に1人の割合でボランティアがケアしてくれたけれども、東北の場合には17.7人に1人しかボランティアが来られていない。ただ、連休中のピークは5月3日でしたが、このときには1万人以上のボランティアが東北の被災地に赴かれて、避難者8.3人に1人の割合でケアされた。そういうのが神戸との比較における、このたびのスケッチであります。

私は、3月11日、防大改革会議というのが市ヶ谷で幹部を集めてありまして、それを終えて、高速道路で横須賀に帰った直後に大揺れになりました。神戸以後、直下型のドカーンと、それに対してリードがあるのかというのに敏感に

なっていますから、この地震は結構遠いよね、よくあるタイプだなと思っていたら、それが終わるべきところに、さらに大きく、ウワーッと揺れ始めたのです。何だ、これは。これは大変だ。

そして停電になって、大変な事態になったのですが、その中で、3月20日には卒業式が予定されていた。防大の場合には任官という意味がありますので、単なるセレモニーではないので、祝賀的なことは抜いて卒業式はちゃんとやらなければいけない。

たとえ総理も来ず、大臣も来ず、だれも来なくても、我々だけでもしっかりやろうと考えました。先輩たちが10万人、現地で奮闘している。それを後ろから支える人材を育成するのが防大です。幹部自衛官をつくる防大の役割ですから、それがしっかりできなければ長続きしないわけですね。一部、卒業式なんかやっているときかという意見もありましたが、祝賀飛行その他はやめ、祝賀会もやらないけれども、本体はしっかりやりました。4月5日には入校式もやりました。

入校式の見通しを我々は誤りました。合格者を出したのに対して何人来るかという、歩どまりが非常に難しい。例年の、過去3カ年、5カ年とかいうふうな動向を分析して、しかし、ことは景気も悪いし、それから、震災があったので、おそらく自衛隊の活躍をみて、自分もやろうという志の人もいるだろうから、昨年より合格者を40名減らしたのです。にもかかわらず、86名定員オーバーという大間違いをやってしまったのです。

特に東北地方の方、きっと来るとおっしゃっている人と、考え中ですという人と、行きませんという人に分かれるのですが、考え中という人は実際には3割ぐらいしか来ないというのが統計上の数字なのです。ことは皆さん全員が来られたのです。やはりほかに東北でやれることがないということがあるかもしれませんし、それから、自衛隊の人が本当によく頑張っているということがインプレッスしたこともあると思うのですが、皆さんおみえになった。

菅首相からの突然の電話

全国的にもそういう傾向があつて、480 名入校定員のところを 562 名の多数を迎えることになって、私どもはいい人材を得られる。成績も 40 点ほど最低点が上がりましたので、うれしい限りなのですが、しかし、財務省に対してはおわびの切腹でもしなきゃいけないかなと思つて、入校式を終えた。その夕方、生まれて初めて菅首相から電話を携帯にいただきました。

何事かと思つたら、復興構想会議というふうにおっしゃいましたので、ああ、これは私に委員になれということだなと思つて、喜んで潔くお引き受けしましょうという心組みをした。ところが、座長とおっしゃつたので、エッと。それは想像もしないことで、「総理、そうはおっしゃいますけれども、私、いま、本務があるのです。防大校長は結構忙しいんですけれども」。「はい、よくわかっています」。「この間、卒業式においでいただいてありがとうございます。しかし、座長ということはちょっと考えさせてください」というので留保して、3 人の副校長さんと相談をした。

こういう中でできる限りのことをやらなければいけないという総意のようなものが、防大の人にもあるし、それから、市ヶ谷、防衛省のほうでも非常に強い。全力でサポートするから、ぜひ頑張つてほしいという。被災地の人たち、あるいはこれからの日本のあり方ということにもかかわることだから、及ばずながらやりましょうということになりました。

それで、この連休には、先ほど紹介いただいたように、現地に行きました。以前、発災 1 カ月後に宮城、岩手を防大校長として視察したことがありました。

防大の副校長は 3 人いて、1 人は高級官僚さんで、市ヶ谷の内局から指名されて来られる人。もう 1 人は、教授陣から選挙で選ばれてくる教務担当の副校長、教授の中の代表者。もう 1 人が制服の陸将なのですね。この陸将の副校長さんを幹事と呼んでいるのですけれども、いま、陸幕長をやっている火箱陸幕長は私の幹事をや

つてくれていたのです。大変すばらしい幹事で、非常に気心が合つて、その後、どんどん偉くなられて、中部方面総監から陸幕長になられた。それから、その次の幹事が君塚東北方面総監なのですね。私を補佐してくれた方々が偉くなって、要路におられる。

この火箱陸幕長、君塚総監のお世話で、宮城、岩手を視察をしたのですが、そのときはほんとに暗かつたですね。特に岩手の三陸海岸は、もう瓦れきに支配された地域。それ以外、何があるか。自衛隊の車が何度か、怪しげな瓦れきを下に敷いたような道を走っていた。施設隊ですから、戦争中、パッと道路をつくつたり、橋をつくつたりするのが商売だから、うまいもので、そこに通っているのは、それ以外は工事車のトラックぐらいしかない。人けがない。

ようやく陸前高田市に初めて完成した仮設住宅というものをみせていただきましたが、非常に寒々とした感じで、ボランティアの人もないですから、寂しいですね。コンビニはもう周辺で開いているのですかといたら、何を認識不足なことをいっておるかという顔をされました。物資なんか来ない、いま来るのは自衛隊等で避難所に無料で持ってくる支援物資だけであつて、コンビニが店開きして仕入れなんかできる状態じゃない、というふうにたしなめられました。

そういう状況でありましたが、2 カ月目を迎えようとする、このゴールデンウィーク、復興構想会議の議長として 3 県すべてに参りましたけれども、随分違った情景になって、復興の歩みもまた極めて多様になってきた。最初に行った福島県自体が多様であります。こちらは県庁横の自治会館、知事と、それから原発によって避難を強いられている市町村長さんたちが 10 名近くお集まりになって、その方々からレクを受けました。

桜満開の里での見えない脅威

ふるさとが本当に好きな自分たちなのに、そのふるさとに帰ることもできない、やり場のな

い焦燥、怒り、政府への不信、そういうものを次々に立って語られる。何か私どもは叱られているような気分ですね。本当にその思い、苦しさということを受けとめるほかはない。

その点は、間もなく避難しなきゃならないであろうというふうに指定されている飯館村へ行ったときも同じであります。5月の連休ですから、飯館村では桜がほぼ満開——を過ぎたところですけども、まだ満開近い。本当に美しい阿武隈の山、里山の春。なのに、音もなく、目にもみえない脅威というのにむしばまれている。何ともいいようのない姿ですよ。

そういう福島県の中でも、30 km圏の外にあって津波災害を受けた新地町とか相馬市あたりに参りますと、全然違うんですね。こういう放射能問題のないところは、非常に力強く前向きなのです。

新地町長は、町役場の屋上に我々を案内して、この足元まで津波が来たのがおわかりでしょう。そして、2~3 km向こう側にある海岸線のほうを指差して、あそこは壊滅的になってしまって、あそこにあったビルすらも消えてしまったものもある。残ったのが奇跡のように2つ、3つある。その向こうの海岸も大きくえぐられたけれども、自分の夢は、あの海岸の砂丘を回復して、その上に太陽光パネルを敷き詰めることだというふうにおっしゃいました。ああ、この人は、このまちは、将来の展望というのを持ちながら頑張っているというふうに、ほっといたしました。

そのもう一つ南の相馬市長は、大変立派な人で、立谷市長というんですけども、あの地震の起こった直後から、市役所の幹部だけでなく、市民の中のしかるべき人も入れて緊急会議を開いた。一枚の大きな紙の中に箱がたくさんあって、なすべきことの筋がダーッと書いてあるのです。これが、あの発災後、午前3時になってできあがったものです。いまも、この線でほぼ走っています、とのことでした。

それで、3時から寝る時間があつたのかどうか知りませんが、「夜が明けたところで、棺おけを注文いたしました」「幾つ注文されたんですか」「500です」「結果的にどうだったです

か、幾つ必要だったんですか」「475です」。これは神わざですね。

兵庫のときにはそういうことはできずに、それができたのは芦屋市の後藤助役だけだったんですね。芦屋市の後藤助役は、風水害の担当で総務関係をやってきたために、非常に鋭い人で、岩園の丘の家でドーンとはね上げられて、これは大変だとすぐ飛びおりて、坂を駆け下って、市役所まで歩いていったんですね。途中で家が壊れて、家族を助けてくれといっているようなのをみながら市役所に入ったのです。

当直の人が2人だけいたので、彼は1人には、すぐお寺へ行け、遺体安置の協力を頼んでこい。それからもう1人を医師会会長のところへやって、たくさんの負傷者が出るから、医師会総動員で協力するようにいってこい。で、自分ひとりになって電話をかけまくったけれども、なかなかつながらない。やっとつながったので、棺おけ100個を頼んだんですね。10万ほどの小さな市である芦屋も100の犠牲が出るんじゃないかと彼は直感したのです。

これは、実は間違っておりました。しかし、100という仮説を立てたために、正午には400というふうに修正したのです。これがびたっと合っていたのです。芦屋市の後藤助役だけがそういうふうな判断をその日のうちにできたんですけれども、相馬市の500というのも大変なものだと思います。

今回は仮設住宅に集会所も

そして、その後、神戸の前例では仮設住宅に問題がありました。老人は仮設住宅の中で孤独死していく。自殺する人も出てくる。

入ったときには、仮設住宅、みんな、大喜びなんです。プレハブの箱ですけども、中にはシステムキッチンもあって、今度の場合には電気や冷蔵庫まで用意してもらって、いままでの避難所に比べて、何と御殿のようだと、みんな、うれしいんですね。ところが、だんだん収容所みたいな気分になってくるのです。集会所一つないというのが神戸の失敗でした。

今度は幸いにも 50 戸に 1 つは集会所、ふれあいセンターとか、そこには医療チームの——病院まではできませんが、巡回してくるお医者様、ボランティアの人たち、あるいは市の行政センターの巡回とか、そういうこともできるようになっているのです。これは非常に大事なことです。相馬市長は、それに加えてお年寄りの人には長屋をつくるという、その図面をみせてくれました。一応個室はあるのですが、その中央のところはみんなの共同の広いスペースがある。そこでお食事をしたり、おしゃべりをしたり、いろんな人が来て交流をしたり、それが大きな中心になっているのですね。大家族の長屋みたいな、そういうのを老人には必要だと図面をかいていらっしやって、すばらしいですね。こういう危機管理から今後の構想までリーダーシップを持っている市長さんが現場にはおられるんだと、こちらのほうが大変励まされました。

その 1 つ南の南相馬市に行くと、桜井市長さんは、あの有名な、世界の 100 人に選ばれた方ですけども、20 km 圏、30 km 圏、そしてそれ以外というので、同じ市でありながら、境遇が全く別なのです。市内が 3 つに分断されている。そういう悲惨さということを説明された。思えば、福島県全体が浜通りと中通りと会津若松も全然違うんですね。そして、東北全体が福島県、宮城県、岩手県と違う。それをまるで一つの市の中で縮図、集約したような境遇に南相馬市は置かれている。

その後、宮城県、岩手県に参りました。宮城県は犠牲者数が最大です。しかしながら、力強く復興を推進している。豊かな仙台を中心とする宮城県。仙台という中心地が健在であるということは非常に大きくて、無事である中心地から、石巻が市として最大の犠牲を出しましたけれども、そこから広がっていけるんですね。ボランティアの人も石巻までは行けるのです。それから、村井知事という人が前向きにはっきり物をいって、どんどん決断する人ですので、宮城県はかなり自信に満ちて復興を先導するという感じです。

前日もそういう気配は強かったのですが、岩手県が特に変わっていた。前回は、さっきいっ

たように、本当に暗い瓦れきの山という印象がありました。陸前高田や大槌町のように、市役所、役場そのものがやられてしまって、大槌町に至っては町長まで亡くなった。そういうところでも、このたびはかなり明るくなっているんですね。前向きになっている。

どうしてか、その理由を私なりに確かめたところでは、第 1 次補正というものが大変きいているのです。4 兆円の第 1 次補正が超党派でできたということが大きかったですね。4 兆円というのはすごい額です。阪神淡路のときが 10 兆円の物損。それに対して 17 兆円かかったというけれども、第 1 次補正段階では 1 兆ぐらいだったと思いますね。今度は 4 兆出すということで、それが現地に非常に響いている。

一次補正の 4 兆円が効いている

例えばどういうことかという、初めは被災者の人は水も食料もないというのが悲痛な叫びですね。ところが、それは何とか物資が来るようになる、もう物によっては余っていますよというニュースが流れたりする。しかし、暖かい食べ物が無いというのが、次の痛切な思いになるのです。やがて暖かい食べ物が出るようになる。しかし、今度の場合にはガソリンが無いというのが叫び声になる。やがて、風呂が無いというふうになるんですね。その後、仮設住宅に入れないという声が大きくなって、そして、菅首相もお盆までにつくりますと宣言されました。本当にできるのかいなと思うようなことをおっしゃった、そういう瞬間がありましたね。

そういう状況を少し前にみながら、このたび、ゴールデンウィークに行ったら、現地では仮設住宅はもう大丈夫です。前に必要だといった数の 6~7 割で足りる、とっているのです。一体どういうわけか。

仮設住宅 1 軒つくるのは、神戸のときは 300 万円といったけれども、いまは 500 万円だそうです。これはプレハブ業者がダーツと箱をつくるということになる。なかなか近場に土地がなかったのが悩みです。ところが、東北地方の

場合には人口減少傾向ですから、民家で、いま、使わなくなっている家が結構あるのです。それに対して国が家賃6万円を出します。家族が多い場合は8万円まで出すということが、第1次補正で可能になったのです。

その結果、システムキッチンのついたプレハブに入るのもいいけれども、民家の家賃を国に出してもらって使わせてもらえるほうがいいという人が結構出てきた。そして、民家の家主もまたありがたいですよ。家賃収入がある。その結果、それが大きなファクターだと思うんですが、初め、要る、要るといった数の6~7割で済むというふうに落ちつきが出てきたのです。

もう一つ落ちつきが出てきたのが瓦れきの問題です。瓦れきは、初めは自衛隊が道を開くということを中心にやり、そして、人命救出というので、瓦れきの下に隠れてしまっている人を捜索するというのでやっておりましたが、その段階が減ってくるとともに、民間業者に国がお金を払って瓦れき除去というものに、いま、移行しております。

そして、なかなか手がつかないといわれていた海の瓦れきですね、これが第1次補正でやれるようになったのです。日当1万2,000円だそうです。漁業関係者で、もうなすすべないと思っただけで避難所でごろごろしたり、あるいはお世話役をしていたりした人が、自分の生業である港、湾の瓦れき除去に、日当をもらって働けるようになったのです。これがその地域を非常に明るくしているんですね。我々もやっていける。もう一度、港を再開できる、漁業をやれる、そういう希望をもたらしたのが、この第1次補正です。

超党派で対処することの意義

超党派というのは本当にありがたいですね。こういう国民的な国難、そして、大変な被災というのを前にして、あの首相じゃいかんとか、あれがどう、これがどうかいいますけれども、いわば、宿命じゃないですかね。つまり、その

瞬間に国難が起こった。そうすると、だれだというよりは、これは与野党協力して、超党派で対処しなければいけない。そういう精神を、立派な国は持っていると思うのです。

イギリスも危機になれば、戦前の大恐慌のときであれ、第二次大戦期であれ、挙国一致内閣というのをやるわけですね。ふだんは、政治というのは対抗者をちゃんと持って、ロイヤルオポジション、女王陛下の反対派というので、お国のために反対派として政府をチェックするというのも必要だけれども、いまや、国が滅ぼされるとか、国難だというときには、そういうことは一時棚上げしてでも、国を救うために、国民を守るために協力するということができればいけない。

イギリスのマクドナルド挙国一致内閣だけじゃなくて、第二次大戦を前にしたルーズベルト政権も、民主党政権ですが、野党共和党の大物、スティムソンとノックスの入閣を求めて、ある種、超党派の政権をつくって危機に対処したわけです。

この東日本大震災というのは、それに劣らない国難だと思うんですね。こういうときには政局、政略よりも、一致協力して被災者を支えるということが望ましいと思っておりましたが、この第1次補正が超党派でできたということの効果を現場でみるにつけ、そのことを改めて痛感した次第です。

そういう次第で、ようやく当面の緊急心配事というのを超えて前向きになってきただけに、急を告げてきたのが、我々のまちをどう再建するのか、私の水につかった土地をどうしてくれるのか。個人ではどうしようもない。そして、気仙沼のようにすばらしい漁港としての機能を持っていた、複合的機能を持って中心地になっていた、その棧橋とか、その拠点が、落ちてしまっているんですね。これを民活で勝手にやりなさいというのでは、どうしても済まないです。

そうすると、水につかった、あるいは地盤が崩れた、それに対して国がやはり支える、そういう制度設計をしないとだめですね。高台に移るといっても、ローンを払い終えた人もいるが、

まだ前のローン、いま建てた家のローンが残っている人もいます。極端な話は、陸前高田市で1週間前に新居をつくって、そこに引っ越して入ったばかりなのに、それがこの大津波でやられてしまったんですね。それで、その人は、私の家は1泊100万円以上の豪邸なんだと笑っていらっしゃる、豪気な人のようですけれども、1週間しか住んでないというふうな境遇があるわけですね。それを自分でやりなさいでは済まない。

すでに制度として集団移転促進法というのがあって、高台等に移転する必要がある場合に、それを国が補助するという制度はあるのですが、それを国が補助するという制度はあるのですが、けちな補助なんですね。住宅だけで、学校や病院は対象にならない。利子分を国が補てんするだとか何とか。しかし、今度の場合はそういうのでは済まないで、本格的な支えが要る。安全なまち、人が亡くなる津波は今度で終わりにしたい、これを最後にしたい、という声を大船渡でも聞きました。

昔は仕方なかったですね。この列島の住人は大自然に抱かれて、その幸のもとで生きてきた。時に大自然は牙をむく、暴虐の限りを尽くす。そのときにはあらがっても仕方がないというので、何とか避難路をつくって、避難訓練をして、命だけは助かる。家は流されても仕方がないというので、首をすくめてやり過ごした。そして、災害一過、つち音高く、また再建するというのが、この列島の人の、それしかない生き方だった。

しかし、近代になって、少し対処能力が高まってきた。明治三陸地震の後、高台へ移転した方々がいる。しかし、その人たちは不便という代償をしっかりと払わされた。あまり港で働くうえで不便なものですから、また下におりてきた人もいます。その人たちがまた津波でやられる。しかし、いまや、道さえちゃんとつければ、高台から港まで10分で車で行き来できる。そして、たとえ下の土地にいても、5階以上のしっかりした鉄筋コンクリートの建物の中に住んでおれば、命は奪われずに済む。それは、ごく普通どここのまちでも行われることになっているわけですね。そうすれば、このたびの人が亡くなる

津波はこれをもって最後にしたいというのも、遠い願望ではない、やりようによってできる。

瓦れきを埋めて鎮魂の森を

私どもの復興構想会議では、安藤忠雄氏が鎮魂の森をつくろう、処理に困っている瓦れきを埋めて、それに土をまぜて海辺の砂丘を作ろうと提案しています。

そうしたところ、森脇教授という横浜国大の名誉教授が我々の会議の事務所に訪ねてこられてまして、松林はだめですよ。松林は塩害には強いが、津波が来たら、陸前高田の高田松原のように簡単にやられちゃう。根がそういうものなんだ。それに対してシイとかタブとかのベストミックスがあるんだ。しっかり広葉樹林の混合林みたいなものをつくると、瓦れきの中にまで根をしっかりと張って非常に強い。たとえ津波がそれを上回る勢いで来ても、その森の中で人は助かりますよ、というふうなことを教えてくださいました。

鎮魂の森であり、希望の丘であるようなものをやはりつくっていかなくやいけないだろう。これから中心になるのは、現地の人も意識がそういうふうになってきているように、安全・安心のまちづくりであり、そして、生業ですね。どうやって食べていけるのか。

単に人口減少の中で何とか復旧しますというのではなくて、すでに震災前から三陸の漁業は大変すばらしい食材だというので、高値で国際市場でも出回るようになっておりました。仙台平野の米というのは、やはり非常に高品質というので、国際的人気も高まっていた。果物もそうです。そういうグローバル化する時代に雄飛できるような、そういう新しい復興ですね、単なる復旧ではない復興、そういうのを支えることができればと思います。

同時に原発の安全性をしっかりと確認しながら、原発が存続するしないにかかわらず、自然エネルギーというものを重視して、それが成り立つような技術革新を進め、そして社会システムを再構築していくということが、今後の日

本に必要なことです。必要とわかりながら、なかなかできなかったこと、そういうのをこの機会に力強く進める。そういうことができればと思っている次第です。

どうも長い間ご清聴ありがとうございました。（拍手）

《質疑応答》

司会（吉田慎一企画委員長、朝日新聞） どうもありがとうございました。阪神大震災との比較、また、最近の被災地訪問を踏まえた、生の声も入れた大きな復興構想の方向をお示しいただいたと思います。

それでは、これから質問に入ります。倉重さん、よろしく願いいたします。

代表質問（倉重篤郎企画委員、毎日新聞） 大きな枠組みについて数点だけですが、お聞きしたいと思います。復興構想会議が作った7原則というものがあります。多分、提言はこれに肉づけされていくものだと思いますので、これに沿ってお尋ねします。最初に挙げられた失われた命への追悼と鎮魂ですが、メモリアルをつくるのか、あるいは戦没者記念式典みたいなものをするのか、いろんなやり方があると思うのですが、それについてまずお考えをお聞かせください。

亡くなった方々の弔い合戦

五百旗頭議長 大変大事な点で、ごらんになった方も多いたと思います。いま、ご指摘いただいた原則1を読ませていただきますと、「失われたおびたしい『いのち』への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。この観点から、鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する」というのが第1原則であります。

いま、倉重さんがいってくださったように、このおびたしい犠牲、それに対する合掌、海に向かって合掌し、根こそぎ崩壊したまちで合掌する。両陛下もああいう瓦れきに向かって長い敬礼をされましたけれども、そうした追悼と鎮魂の思いを根深く持ちたい。我々は生き残った、しかし、亡くなった人の分も頑張るんだ、弔い合戦をする心を土台にしたいと思います。

第二次大戦後、日本の復興を支えた人材で、そのようなことを語る人が少なくないですね。友は倒れた。針の先ほどの偶然で、自分は生き残った。彼の分も頑張るんだという思いが、戦後の復興の大きな力だったと思うんですね。

神戸地震のときにも、我々は似た思いを持ちました。私のゼミ生も死に、神戸大学生39名、全体で6,000人余り、あの狭い地域で死んだ。本当に多くの方が犠牲になった。彼らの分も頑張ろうというので、私たちは21世紀研究機構という震災記念の兵庫のシンクタンクを作って活動しています。実は、ことし『災害対策全書』という全4巻を出版しようとしています。これが、神戸で生き残った者たちが、これからの世代あるいは世界への贈り物にしたいという思いでつくるものなんですね。地震を中心にあらゆる災害、津波も入っております。もうちょっと早く出せていたらという思いが禁じ得ないんですね。

500年前の米の地震記録が日本に

最近、津波の研究、地震の研究が、そのメカの面からも進んでいますし、それから、文献的に、歴史的にも進んできているのです。

例えばおもしろいのが、バンクーバー・シアトル沖にやはりプレートが交錯しているところがあって、これが500年置きに大地震、大津波を起こしているということが、地層研究等でわかってきたんですね。ところが、500年前というと1700年ごろですから、アメリカはまだインディアンしかいなかったもので、記録がないんですね。しかし、あそこで起こった大地震による津波が日本に来て、日本の大津波になって、それが文献で記録されているんです。で、ぴたっ

と合う。日本の文献によって、日にちまで確認されたというふうなことがあるんですね。

そういう研究が非常に進んできて、私も2カ月前に河田教授の『津波災害』という岩波新書の書評をやって、大津波が必ず来るというふうなことを書いていたのですが、あれをもう少し多くの人を読んでいたら、犠牲はこれほどに至らなかったかもしれないというふうに思います。

神戸でつくる『災害対策全書』というのは、そういう思いを込めて、あらゆる災害、戦争以外の事故とか社会災害を含めてやったものですが、やはり生き残った者で何とかしようという思いがあるんです。このたびの東日本大震災に対しての姿勢というのも、やはり亡くなった方への鎮魂の想い、それを土台にしながら、津波で流され、おびたしい犠牲を出したという歴史を克服する努力、被災された人たちを支えようという想いであります。

その鎮魂の部分は、先ほどもいいましたように、砂丘、それほどでない砂丘と防風林があるところでも安全上の意味を持っている。例えば松島の航空自衛隊の基地がやられましたですね。100億円以上する、あそこは練習機ですけども、防大の予算が年間150億だったかな、仕分け対象になって、減らしなさいとかいわれているのですが、最新型の飛行機1機分なんですよね。それが20何機も一気に流されるという、大変悲惨な事態です。

現地へ行って、その事情がよくわかりました。砂丘があつて、防風林があつて、その手前には仙台藩がつくった運河があるんですね。で、大概の津波はそれとまっちゃって、あの航空基地まで来ないようになっているのです。ところが、今度は超弩級の津波ですから、それで半分以上抑えられたんですが、それを越えてなおやってきたんですね。

それが来る前に、しかし、両側の住宅街があつて、住宅街には防風林はないんですね。むき出しに開発された住宅街。そこはもうみるも無残な、残る家がないというほどやられて、船が住宅街に入っていたりする。そちらのほうから回った波がダーッと入ってきた。それにおくれ

て防風林を越えてきたのがやってきたけれども、2メートルほど、1階レベルでとどまったというのです。ですから、2階へ全員を退去させたので、命は助かったというのが実情だったようです。

あのような伝統的防風林程度でも、それだけの抑制効果を持つのです。で、少し瓦れきを使い、一部、コンクリートの構造物なんかを入れたりして、砂丘をつくり、そして、森脇教授がいうように、ベストミックスの根の強い樹木を育てれば、これは立派に津波対策の意味を持ち得るというふうに思います。そういうのを、鎮魂の森としつつ、これからの人を支える希望としたい。

リアス式海岸の三陸の中ではしかるべきところにそのような丘をつくって、犠牲者の名を刻んだ鎮魂の丘であり、日ごろは市民の憩いの場として、公園として、美しい海をみはるかす丘だけれども、災害のときには避難所になる。そういうふうなものを、捨て場に困っている瓦れきを使ってやるのがいいのではないかと。

それとともに非常に大事なことは、早いうちからこの震災の全記録というのをしっかりと残すことだ。アーカイブスを持つことだと思うんですね。このたび、神戸と違って広がり大きいだけに、これは大きな声をかけなきゃいけないと思っております。そして、国際的な協力も得て、第一級の学術調査団、この津波のメカニズム、災害の実態分析と教訓、そうしたことをしっかりとやるべきだと思いますね。

そのことが、ある意味、鎮魂なんじゃないですかね。何が起こったのか、なぜ起こったのか、どうすればそういう悲劇は避けられるのか。そういう意味で、できるだけ早くスタートをして、しかし、仕上げるのには、いろんな事情がありますから、これは時間をかける。鎮魂の森はそれぞれのまちでどういうふうにつくるかということを考えていく。しかし、それをつくろうと思っている者には、ある種の制度的な支えを国が用意する必要があるんじゃないかと思っている次第です。

土地対策で革命的な措置を

倉重委員 第5原則なんですけれども、今回の目標は、単なる復旧じゃなくて、復興と日本再生の同時進行という、ある意味で非常に目標に掲げたものが高いわけですね。この場合に、具体的に、それを貫く、再生という方向性を貫くコンセプトは何になるのかということと、実際問題として、これを実現するためには、多分、土地の問題、私有権をどうするかという問題、それから規制緩和の特区をどうするか、この2つが大きな武器になると思うんですけれども、この辺の方向性はいかがでしょうか。

五百旗頭議長 ご指摘のとおりであります。「被災地域の復興なくして日本経済の再生はない。日本経済の再生なくして被災地域の真の復興はない。この認識に立ち、大震災からの復興と日本再生の同時進行を目指す」というのが第5原則であります。

いうべくして、容易ではないとは思いますが。しかし、多くのエコノミストの分析によれば、いま日本は、節電だ、放射能への恐怖で、かなりかじかんでおりますし、ついこの間まではすべて自粛という雰囲気でありました。ようやくそれを抜け出しても、しばらくの間は大変でしょう。しかし、次に来るのは復興需要だと思うのですね。

第1次補正だけで4兆円、大変な額です。あの地方にとって決して小さくない。さらに、今度、まちづくり、そして産業の復興ということも国が思い切っててこ入れするということになると、復興需要シーズンになっていくと思うんですね。そのときに、単なる復旧で、神戸港のように、古い、競争力を失った12mをまた復旧するのではなくて、気仙沼の現地の人がいっておいりました、マグロ遠洋漁業の大型船が直接横着けできるよう埠頭が今度は欲しい。

これはうれしいですね。現地の人がかこれほどやられた中でクシャッとなっていない。「もう細々生きて行けたらいいよ」なんていってないんですね。もっと立派なもの、世界のマーケットでやっていけるような港を再建したいんだ。これは貴重ですね。国はしっかりそれにこたえ

て、制度と資金をもって支える。

そのために、倉重さんがご指摘のように、土地の問題。土地を国が買い上げるのか、あるいは借り上げるのか、それならばどの価格か。被災前の価格でやれば、国の出費は相当になります。いまの時価でいえば、ほとんどただですね。水につかって沈下してしまったところをだれが買うか、値段もつかないということになるかもしれない。そういうものの間のどこかで補償を考えるといいのか。あるいはそれよりも新しい安全なまちをつくる。その経費のほうを国がしっかりと支えて、そして、流された地の人が住む。そのために使うほうが前向きなのではないか、健全なのではないか、未来志向なのではないかという声も聞きます。

これは法体系の私有財産権の原理からいうと、やや革命的な面がある。しかし、このほうがもしかしたら合理的かもしれない。いろいろな可能性について、我々の会議は検討したいと思います。

特区というのは、どうしても要るのではないかな。私ども会議は、下に検討部会という専門家グループを持っております。前回、第4回が終わったところで、3項目の検討を指示いたしました。その一つがこの特区です。人がおっしゃっている特区は、実は、内容多岐なんです。規制緩和のことを考えていらっしゃる人もいますし、各省庁が持っているルールというのを全部押さえて、それを上から新しくかぶせてしまうような、そういうことを考えているのもいます。皆さん、特区という便利な言葉でいろんなことをイメージしていらっしゃるんですね。その概念整理をしたうえで、どういうものが必要かということを検討するように、と飯尾部会長に前回の会議で要請したところです。そういう意味で、ご指摘の点は極めて重要な今後の中心になるのではないかと思います。

倉重委員 第6原則、これもすごく重要だと思うんですけれども、原発被災地への支援と復興に配慮すると書いてあります。先ほどおっしゃったように、五重苦という、ほかの地域とは全く違う手当てと対策をしなきゃいけないと思

うんですけれども、最後までこれを抱いて答申を出されるのか。それともどこかの段階で別に特設チームで切り離して専門的に議論していただくのか、その辺はいかがでしょうか。

原発問題抜きにして何の会議か

五百旗頭議長 微妙な問題で、実は、第1回会議で大もめにもめたのがこの点です。総理から、原発の対処の問題は、それ自体が毎日動くような大変なことなので、復興構想会議のほうはもう少し長期的な観点に立って復興全般を考えるのだから、原発対処は別のところでやってもらうからね、といわれたんですね。

それはもっともだと思います。私たちの会議、原発専門家なんかは委員におりません。ですから、それはむしろ妥当だと思ったのですが、その旨、私が議長として申しあげたところ、憤りが爆発いたしました。梅原特別顧問に至っては、原発問題を抜きにして何の会議か、そもそもこの原発事故は西洋文明、デカルト以来の破綻を示したものだだったと。何か大変なお話になってまいりました。そんなことはいってない、原発の危機管理は我々の任務ではないといっているだけだ。復興は原発地域を含めて我々の問題だということで落ちついたのです。

まだ危険はなくなっていないけれども、大局的には安定化に向かっているというふうに思います。早くそれが収束することを期待しながら、現在の離散した、帰れない大変さ、そして、やがて一応収束した後、それをどういうふうに復興していくか。

ある人は、あの地域はもう太陽光パネルを敷き詰めたらいいんじゃないかといったら、地元の人には必ずしもそうは望んでないよというふうな意見があったりします。福島原発問題が終わるまで、この復興構想会議の任務は終わらないというふうにいふべきである、という言葉が会議での共感を呼びました。

どこまで続くか、我々自身が決める問題ではないかもしれませんが、我々の精神としては、福島の被災というものをやはり抱き抱えていく、最後までそれを大事にする。同じ日本

人の中で、あきらめるなどということは絶対にあってはいけない。やはり大事なことは、たくさんの方が犠牲になりましたし、それから、物としての日本はひどくつぶされました。でも、日本人の心は失われてないということを示すのが非常に大事だと思っております。

倉重委員 歴史家である五百旗頭真さんにお聞きしたいんですけれども、今回の事態を何になぞらえたらいいのかということです。

そして、その五百旗頭真さんという人は、歴史家を超えて別の仕事をされようとしているんですけれども、その場合は後藤新平的な仕事をされるのか、それとも下河辺淳さんの仕事をされるのか、ほかの仕事をされるのか、それはいかがでしょうか。

五百旗頭議長 どれとも違うような気がするんです。前半部でおっしゃったことは、私、強く思っているところで、日本の歴史というのについて躍進期というのがある。日本の歴史的躍進期、私は決定的なのを一つ挙げろといったら、663年の白村江の戦いで、大和の2万7,000の大軍が朝鮮半島に繰り出した。そして、唐・新羅の連合軍の迎え撃ちに遭って、一日で壊滅したんです、惨敗した。

で、その後、必ず唐・新羅の連合軍が大和に攻め込んでくるというふうに思って、全国動員し、防人を東北からも動員して、そして、のろしの通信網をつくって、そして九州太宰府には大野城、基肄城という城、そして堀ですね、水城をつくり、最近明らかになったのでは、62 km南の熊本県に入った菊池城までつくった。もし太宰府が落ちた場合には、そこを新しい首都、拠点にして頑張るといった態度までとっていたんですね。

敗戦によって大国から学んだ歴史

それほど真剣に安全保障を考えながら、しかし、それ以上の努力をしたのは、敗戦によって、唐という国の強さと唐文明のすごみを知ったんですね。当時は、ローマ帝国が衰退した後、世

界で一番強力な文明は唐だった。この唐文明にやられるかもしれないという中で、大和の人たちは、唐の文明、律令国家の制度を懸命に学んだ。狂ったように一生懸命学んで、50年後の710年に平城京をつくったのです。これは、唐の都のミニチュアです。ほぼ唐文明の水準を、つまり、当時の世界水準をこなしたということのあかしだったのですね。

これはすごいことで、日本の文明水準というのは、この瞬間に世界水準に達したんですね。その後、平安時代は割と落ちついて、漢字に仮名をまじえて独自の文化的展開、『源氏物語』というすばらしい作品が1,000年前に生まれた。

応仁の乱から戦国時代、国は乱れに乱れて、もうこの国はおしまいだ、どうしようもない、だれもとめられない。いまの総理がどうかとか、そういう問題のレベルではないんですね。もう国中血で血を洗う騒乱を繰り返して、だれも責任持てないのかというほどの悲惨さだった。しかし、その中でも種子島、銃がやってくると、50年のうちに世界一の保有国、生産国になっちゃうという水準があるのですね。

ひどい騒乱、いいかげんにという思いが、徳川の、今度は逆に300年近い平和の時代というのをつくる。その江戸の文化水準、文明水準、公衆衛生の水準、あるいは識字率。藩校で武士が習うだけじゃなくて、寺子屋で庶民も習う。その識字率というのは、当時のヨーロッパの水準に劣らないんですね。というふうな高い水準、白村江の後50年で達したものだというのは、決してばかにならない。

しかし、近代の産業革命がイギリスを中心に起こっている間に日本は鎖国していたので、数十年のギャップができた。それで、ペリーの黒船に日本は国を開かされたわけですね。これで大きな落差を思い知らされて、今度は懸命に西洋文明を学習した。ペリーが来てから50年で西洋の軍事大国ロシアに勝利したのです。これは、西洋文明をそれなりにこなした、並び立つ存在になり得た。国禁を破られた衝撃の後、50年で近代西洋文明をもこなすという能力を示したのですね。

唐文明をこなし、今度は西洋文明をこなし、

せっかくそうしたものを、愚かな、世界を敵とする戦争によってひとたびは失った。けれども、敗戦の中でアメリカの力——戦争する前は陸軍の人なんかは、「アメリカなんていうのは、昼間から婦人とダンスをしていちゃついているような軟弱の徒だから、総力戦には耐えられないから、大和魂さえあれば負けない」というようなことをいっておりましたが、どうしてどうして大変なたくましさを持っている。すばらしい力強い文明だ、科学技術でも大変なものだということ認識して戦後はアメリカから学習しながら、技術、経済の高度成長をやったわけですね。

その際に、非常に興味深いと思いますのは、ジョージ・アリヨシさんという、ハワイ州知事を後にやった人が、廃墟の昭和20年の東京に来て、暮れに有楽町の高架下から街角を歩いたら、坊やが靴磨きをしているので、随分いい子そうだから磨いてもらった。心を込めて一生懸命やってくれた。それで、大変感心して、アメリカでは靴磨き少年というものはチンピラ、やくざの登竜門みたいな位置にあるのに、日本の靴磨きの坊やはいいい子だなど。

で、兵舎に帰って白いパンを2つに割って、そこにバターとジャムをいっぱい塗り込んで、あの子にプレゼントしてやろうと思って戻ってきたというんですね。「これ、君に上げる」といったら、いやいや、もうさっきいただきましたと遠慮するけれども、「君のためにわざわざ持ってきたんだから、もらってよ」といったら、大変恐縮しながら受け取って、きっと腹ぺこだからかぶりつくと思ったら、そのまま袋に入れちゃった。「どうして食べないの？」と聞いたら、「家に妹がいるんです」。「へえ、妹さんは幾つ?」「3歳」「名前は?」「マリコです」「君は?」といったら、7歳だ。

7歳のわんぱく盛りであるはずの子供が、自分が腹ぺこなのに、妹のためにこれを持って帰ろうとする。彼はその瞬間に思ったというんですね。物としての日本は完全に壊滅した。しかし、日本人の心は失われていない。そうである限り、必ず日本民族はまたよみがえると、その瞬間に確信したと彼はおっしゃるんですね。

もちろん、いろいろな大変なこと、不祥事は

ありますけれども、この大震災は、あの第二次大戦の310万の犠牲を出したものほどではない。けれども、落ち切ってからしかはね上がらない日本ではなくて、大変な国難の中で、もう一度心をしっかりと持って再建に赴く日本というのは、歴史の中で何度もあったし、これを何とかよみがえらせたいというのが、私の歴史家としての夢です。

司会 どうもありがとうございました。それでは、時間はもう近づいてまいりましたが、貴重な機会でありますので、フロアから質問を受けたいと思います。

質問 格調高い方向性を示していただいたことに関して、まず感謝申し上げます。一点、最近、被災地の首長さんや、あるいは医療従事者のトップが、やはり東京で話し合われている復興構想会議と、自分たちが日々格闘している間の情報がある程度時差がある。すき間があるということで、できることならば、定期的にウオッチをされるような形で、例えば岩手の盛岡、宮城の仙台、福島の福島市というところで、それぞれ復興構想会議を順番に個別に開いていただくようなことを希望されていると伺っております。そういうことは実現性を考えておられるでしょうか。

200被災市町村にアンケート調査

五百旗頭議長 ありがとうございます。私、直接、そのような要請は聞いていなかったんですけども、現地との間のギャップということは非常に重要な問題だと思っております。

連休のときには、全員で手分けして現地へ行き、私自身は3つも行って、さらに、福島と岩手の間は2日間しかあいてなかったのも、その間、福島と仙台にとどまって、折入ってお話を聞くというようなこともいたしました。しかし、連休が終わったら東京に戻って、その後の変化には鈍感になっているということではいけないと思うんですね。

それで、帰ってきて、いまやっておりますこ

とは、委員の一人の大西先生という人が提案されたのを採択させていただいたんですが、200ほどある被災市町村全部にアンケートをする。この点はどうかということ質問票をつくりまして、それをすべてのところから答えていただく。それを我々の、6月末の提言の土台の一つにしようということ、いま、準備を進めているところです。5月中にこれをやって、6月に出したい。

そして、おっしゃるような現地に赴いてというのは、我々16~17名、事務局等を入れると30名のほどの者が動くということは、それほど易しくはない。特に6月に仕上げるまでは、かなりもう一気呵成というんでしょうか、夜昼もないほどにやっていかなければいけない。

それで、第1次提言を出したところで、また現地へ何らかの形で、個別に現地事情を知るような努力はいろいろな仕方で行きたいと思えます。そして3人の知事さんが我々の会のメンバーです。それから、全国市長会長をやっている森さんという、新潟県の長岡の市長さんですが、彼が検討部会の部会長代理をやってくれているんですね。ですから、会議でもよく、この点はどうですかと県知事と森さんに聞いたりするというようなことをやっております。

そういうことによって、ギャップができないように、温度差が出ないように、とんちんかんにならないようにということは、大いに心しておりますが、具体的に会議を向こうでできるようになるのがどの時点で来るかということについては、ちょっといまは申しあげられません。

質問 復興構想7原則のうち、国民全体の連帯と分かち合いによって復興を促進するという7つ目の原則と、復興財源、税についての関係のご見解を改めてお聞かせください。

五百旗頭議長 第7原則は、「今を生きる私たち全てがこの大災害を自らのことと受け止め、国民全体の連帯と分かち合いによって復興を推進するものとする」というふうにしております。最後の締めになる第7原則で、全国民で支えようとの意思を示しています。

では、「国民全体の連帯と分かち合い」とは何なのか、そこに復興税は含まれるのか、ということがご趣旨だと思うんですが、私どもは結論的にいえばベストミックスが何かということを考えたいと思っています。

かつてない義援金が集まっております。義援金だけでなく、政府が新しい寄附税制をつくったようですね。例えば500万円寄附をしたら、半額を。税の免除の対象にするというので、国が半分引き受けて、半分、本人というふうな。そういうのに励まされて多くの寄附が行われることは期待いたしますし、それ以外に民活を利用するということが大事だということを、ビジネス関係の方あるいは金融関係の方、皆さん、おっしゃいますね。

私はあまり専門ではないんですが、ある人が熱心に提案してくださったのでは、例えば新しい証券をつくって、1,000万円、それを買う。そうすると、700万円までは国が元本保証して、どうあってもそれは返してもらえるようにする。あと300万円が、そのまちづくり会社をつくって、まちづくりがうまくいった場合には、それが倍になるかもしれない。大変魅力あるいいプランだと思ったところを買えばいい。しかし、不幸にして、武運つたなく、そのまちづくりがつぶれてしまったら、300万円分は減ったりなくなったりするかもしれない。そういう新しい証券をつくって民間資金を活用すべきだ、という案なんかも伺っております。

そういうことをやっても、これほどの巨大な災害ですから、どうしても公債を出さなきゃいけないでしょう、復興国債。で、どういうふうに償還するのか。

財政的にも日本は「レベル7」

これまで日本は、すでに消費税なしにはやれないほどに財政規模が膨らんでいます。いや、先に行革で無駄を減らしてとかいって、できた新政権も、また結局は少しばかり端数が減るかどうかというぐらいであって、どーんと必要なものをカバーできてない節減なんですね。

それを、大平さんのときから、増税をいって

選挙したら必ず負けるというので、政治的には大変タブーになり、敏感になってしまっている。したがって、私が復興税というのを口ずさんだら、たちまち新聞の一面に出て、だれがいったのか、消費税である、というふうな解説までついていたりするし、何だかうっとうしい話を持ち出したみたいな雰囲気になったりするわけですね。

だけど、少子化していく将来の世代に先送りし、つけ回していくということは、この災害がなくても難しかったらと思うんですね。それをやっていくと、経済財政的に日本はレベル7であるというので、ギリシャと同じく、この国の経済は破綻であるというふうに国際的に認定されたら、チェルノブイリと同じというお話とは全然違うんですね。日本は世界経済の中で壊滅的な打撃を受けることになる。

そういうことにならないためには、やはり同世代でちゃんと対処するということが必要なんだと大局的には思っております。そして、そこへ災害が起こって、これはもうお気の毒だからといって、すべてを借金で、GDP180%の借金を抱えている国が、またさらにそれを上積みするというのをやると、レベル7であるということへの引き金になってしまうのではないかな。

やはりこの悲惨というのは、現在の世代で、将来へつけ回ししないで、何とか支え上げるということをするべきなのではないかというふうな思いを持っています。しかし、不況の中でさらに増税をしたら経済が死んでしまうという、生き物の問題がありますね。そうしないため、そういうふうな副作用をもたらさないような仕方では支えるというベストミックスは何なのか、というふうなことを考えなきゃいけないのではないかな。

そういう意味で、手法は何も書いておりませんが、どの手法も排除しない。すべての可能性の中でのベストミックスは何かということ、我々はこれから共同で考えなければいけないのではないかというふうな趣旨でございます。

質問 農業の復興についてちょっとお伺いしたいんですが、もともと高齢化している地域

では、零細な規模の農家さんがたくさんおりました、片や、意欲のある大規模を目指す農家さんもいらっしゃる。復興の姿を描くうえで、こういった両者の共存というのをどういうふうに図っていかれる。

五百旗頭議長 こちらのほうが教わりたいという問題でありますけれども、例えばまちによっては、漁業の後継者、農業の後継者がいるのは2~3割だよ。それ以外のところは、いま、かなりご年配になった人の後は当てがないよ、というふうな話を聞いたりいたします。これは大変シリアスな事態ですが、大震災からの復旧で何とかもとに戻したけれども、気がついたら担い手がいなかったということでは困るわけですね。

奥尻島の不幸というお話をよく聞きます。あそこは大変な津波を島がかぶってしまって、そして、全国から義援金が集まって、神戸やこのたびと違って人口が少ないものですから、1人当たりは大変な額になったんですね。それに国も後押しして、しっかりとした防潮堤や高台のまちをつくったわけです。しかし、産業が乏しい。住む人が減ってしまっていて、非常に寂しいというんですね。

外国人労働者の永住化できないか

そういう事態にならないためにはどうしたらいいのかというのは、非常に重大な長期的な問題ですね。これはやはり魅力ある新しい経営形態というふうなものが出て、若い人が、それならばおれもやろう、そういうふうな魅力というものをどこかで出していかなければいけないのだろう。少なくともマーケットの中で、できれば国際マーケットの中でやっていけるということになると、結構若い人の中でも、やろうじゃないかという方を吸引できるのではないかという期待をしております。

それからもう一つ、それに関連して、国際的な、外国人をどういうふうに活用するのかということ。まだ我々の会議でその問題は取り上げておりません。中国では、いま、日本イメージ

がすごくよくなっているんですね。この災害の中で中国人の研修生、若い女の子が被災地にいて、佐藤さんという方がみんなを高台に逃がして救われたわけですね。中国人をみんな救っておいて、みずからはさらにだれかを助けようとおりにって犠牲になった。その話を中心に、中国では、どんなに日本人が立派かという報道が何度もなされて、いま、中国における親日感情というのは非常に高まっているんですね。

ということに示されるのは、実は、あの漁業地域あるいは農業地域でも、外国人労働者、研修生という名において働いてもらっている人たちには成り立たない実態があったわけですね。この人たち、研修生という擬制のもとでまた復活しようとするのか、あるいは過疎化していく日本社会の中で、フィリピンやインドネシアの介護をしてくれる人もそうですけれども、もう少しポジティブに、確かにこの社会を支える人だということがわかれば、もう住んでいただく、永住していただく、日本人になっていただくということを考えなくていいのか。

そういうことを含めて、日本国内及び国際的な人材を吸引するということのあり方も考えなければいけないんだろうな。しかし、これは重いテーマで、短期間に我々の手に負えるかどうかなどと思いながら、大事なことだと思っている次第です。

司会 ありがとうございます。15分ほどオーバーさせていただきましたが、きょうの昼食会はここで終わりにさせていただきたいと思えます。

きょうのお話の前に五百旗先生に恒例の揮毫をしていただきました。「敬天愛人」、西郷隆盛の有名な言葉ですが、天を敬い、人を愛する。先生のお話ですと、このタイミングでこれを揮毫していただいたお気持ちは、動乱のとき、大方針というのはやっぱり大義をしっかりと踏まえるけれども、肉づけは人への愛というものをきちんと踏まえたい、こういうご趣旨だそうでございます。きょうは本当にありがとうございます。（拍手）

（文責・編集部）